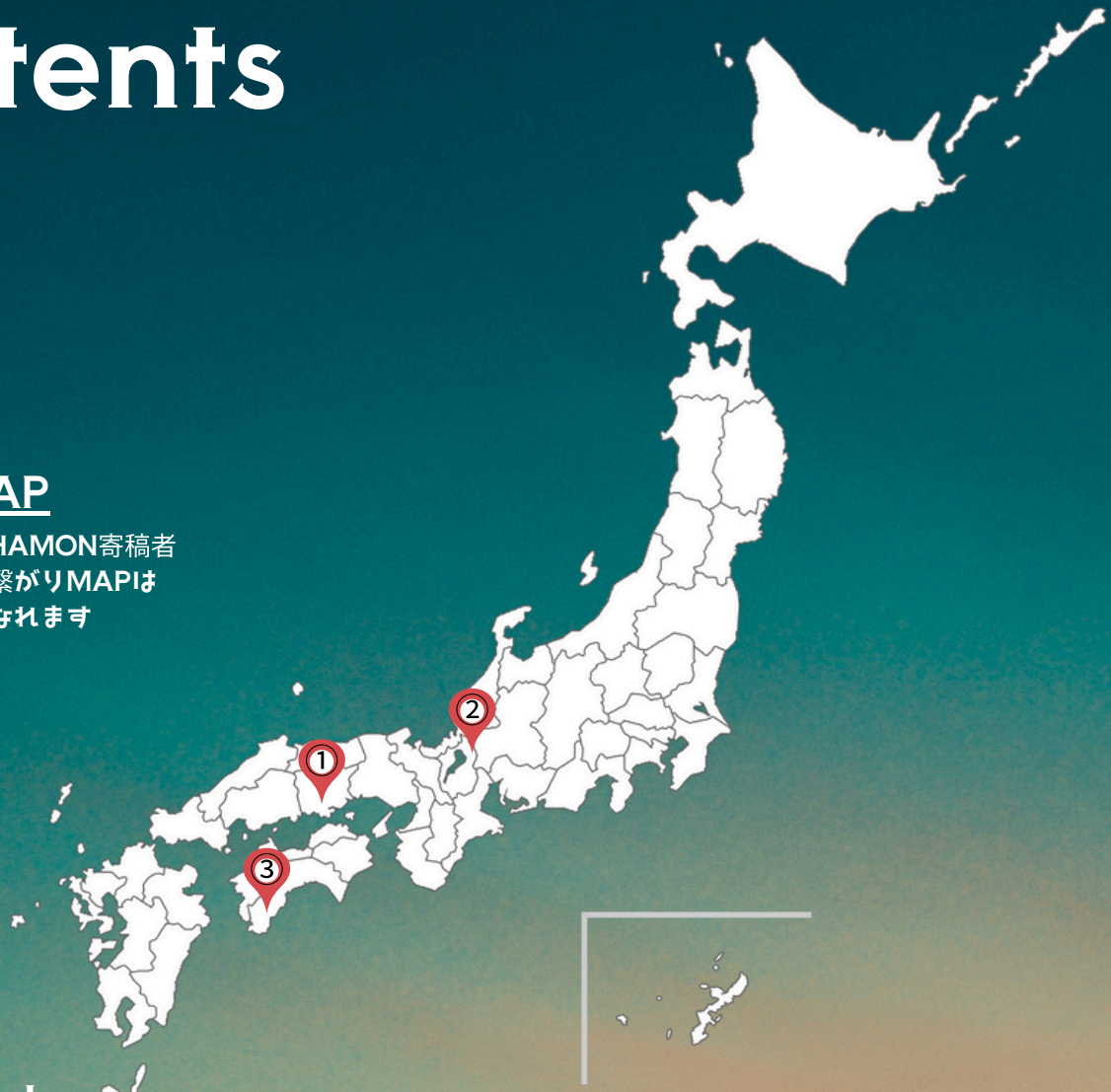
HAMON

Vol.14・15
合併号

自然と生きる人の情報誌

©砂浜美術館

contents



走林社中MAP

モモの部屋会員、HAMON寄稿者
ラジオ出演者など繋がりMAPは
こちらからご覧になれます

Special Thanks

団体紹介 ①【岡山県】シェアリングネイチャー協会 勝間光弘氏 ・・・1

②【滋賀県】近江淡水生物研究所 代表 向田直人氏 ・・・2

③【高知県】うみのこども 代表 中谷みどり氏 ・・・3

プロジェクト紹介『ひとり親家庭支援事業の協働プロジェクト』 ・・・4

大学研究紹介 『野外教育』をビジネス視点で ・・・5
日本文理大学 矢野 達也氏

コラム一滴 『森と食卓をつなぐ』 ・・・6
青森大学総合経営学部 教授 佐々木 豊志氏

編集者コラム①『自然災害』から考える座談会 Part2 ・・・7-8
走林社中 幹事 谷 慶子氏

②『旅から学ぶ』 ・・・9
走林社中 運営スタッフ 森本弘太氏

編集後記 HAMONプロジェクトメンバーより

団体紹介① 岡山県シェアリングネイチャー協会 理事 勝間（かつま） 光洋（みつひろ）氏

自然との対話から始まる学び

元小学校校長であり、岡山県シェアリングネイチャー協会理事として活動する勝間光洋氏に話を伺った。

▼シェアリングネイチャーとの出会い

山あいの学校に勤務していた頃、勝間さんは「自然に囲まれているのに、子どもたちが自然を知らない」ことに疑問を感じ、地域の虫や魚、花などを調べる活動を始め、順調に子どもたちが自然に興味をもつようになっていった。しかし、ある時、一年生の男の子が見慣れない花を見つけ、真っ先に教室へ戻り、図鑑を手に取った姿を目にしたとき、勝間さんの中で何かが立ち止まった。それで、違和感を覚えた。「どうして『きれいだな』より先に『名前』なんだろう。」自然との出会いが知識の習得にすり替わる感覚。その違和感こそが、後に大きな方向転換をもたらす。雑誌で見つけたネイチャーゲーム講座に参加したとき、彼ははっきりと感じたという。「自然は名前ではなく『感じる』ことから始まる」。実際に学校へ戻り取り入れてみると、子どもたちの表情は驚くほど変わった。自然の中で心がほぐれ、生き生きと動き出す。その姿が、勝間さんに新しい道を示した。

▼自然がひらいた子どもの扉

この実践を続けようと決意した背景には、もう一つの決定的な体験がある。教室では落ち着けなかった特別支援の子が、外へ出ると風や鳥の声にじっと耳を澄ませ、「楽しい」とつぶやいた瞬間だった。自然には、人の心をそっと整える力がある。その確信が、現在の活動を支える柱となっている。

▼現在の取り組み

勝間さんが大切にしているのは、子どもでも大人でも「なんとなく心地いい」という感覚だという。成果を求め過ぎず、自然の中でただ『気持ちいい』と感じる。そのあいまいで柔らかな手触りこそが、心をひらく始まりになる。近年はマインドフルネス、静かなヨガ、コーチングなどとの掛け合わせも積極的に行う。自然の中で深く呼吸し、自分の内側へ耳を澄ませると、普段ならネガティブに傾きがちな考えが、自然と前向きになるという。大学生が森の中で進路への不安を整理したり、社会人が『切り替え』を取り戻したり――自然との対話には、人を本来の状態へ戻す力が確かに宿っている。

▼これからの展望

高齢化が進む社会の中で、世代を越えて自然を共有できる場をつくりたいと勝間さんは語る。高齢者が自然の中で昔を思い出し、子どもと共に時間を味わう。そんな三世代の自然体験を描いている。さらに、自然の中で問いと向き合う「ネイチャーコーチング」にも手応えを感じており、若者が自分の未来を見つめ直す場として育てていきたいという。

▼取材者：難波（なんば） 勇吉（ゆうきち）
公益財団法人 YMCA せとうち
プログラムディレクター

岡山県出身。大学で教育課程を修了後、学生時代に培ったアウトドア経験を軸に、北アルプスの山小屋番やスキーインストラクターとして活動。2年間の山と雪の現場での経験を経て、YMCA せとうちに入職。現在は PFI 事業として運営する倉敷市自然の家のスタッフとしての業務に加え、プログラムディレクターとして青少年の野外活動・組織キャンプ事業の企画・指導に携わっている。

団体紹介②

NPO法人 近江淡水生物研究所

代表 向田（むかいだ） 直人（なおと）氏

駅前から発信する琵琶湖の魚たちの魅力！

近江淡水生物研究所は、滋賀県長浜市を拠点とするNPO法人で、淡水環境に生息する魚類の保護と水槽展示を通じた啓発活動を通し、生物多様性の維持と持続可能な社会構築への寄与をめざして活動しています。旗振り役をされているのは、代表の向田直人さんです。きっかけは身近な魚であるメダカが絶滅危惧種に指定されたことに強い危機感を感じたことです。これを機に長浜で様々な活動を展開しています。

▼小さなびわ湖水族館オサカナラボ

長浜駅前「えきまちテラス長浜」にある“小さなびわ湖水族館 オサカナラボ”を管理・運営しています。入場無料・駅前という立地もあり、地元の親子から観光客まで様々な方に魚を見てもらうことができます。琵琶湖水系の淡水魚を中心に五十種類以上が展示されています。まさに魚や琵琶湖に興味をもつ入り口・きっかけとなる場所です。さらに幅広い層に来てもらうしかけとして「小さな水族館の音楽会」も開催しています。

▼長浜MLGsCAFE

「長浜 MLGs CAFE」は、毎月第四日曜日に開催される環境保全や生物多様性に関する学習会です。専門家の話を聞くとともに参加者と学びを深め合い、身近な水環境や生物多様性についての理解を深めることを目的としています。自然科学から社会科学まで、琵琶湖に関わる幅広いテーマで開催しています。テーマを毎月変えて実施することで、多様な方の興味・関心に届くことをめざしています。

えきまちテラス長浜

生き物観察会の様子

▼米川での生き物観察会

「遊びながら学ぶ」をテーマに漁の体験と生物調査を同時にできる環境学習イベントを実施しています。会員の指導のもと、水生生物を調べたり、採れたアユを天ぷらにして食べたりもします。自分で捕まえ、自分で食べることで、きっと心に残る体験になると思います。

▼取材者

魚と子どものネットワーク

代表 新玉（しんぎょく） 拓也（たくや） 氏

三重県亀山市出身。環境省登録 環境カウンセラー（市民部門）

大学・大学院に在学中、琵琶湖流域の淡水魚の調査や自然体験を中心とした環境教育に関わる。それを地元で実践するため二〇〇八年に魚と子どもとネットワークを立ち上げる。主に、亀山里山公園みちくさでの「里山塾」や鈴鹿川流域での「鈴鹿川探検隊」などを通じ、子どもが自然に触れる機会の創出に努めている。

Instagram

https://www.instagram.com/sakanatokodomo/

団体紹介③　うみのこども　（高知県黒潮町）

代表　中谷（なかたに）　みどり氏

うみのこども

▼うみのこどもの活動

二〇二〇年、当時小学生の子育てをする母親二人で立ち上げた「うみのこども」は、年四回程のビーチクリーンや学校への環境学習の出張授業、屋外での自然体験活動などを展開。高知県地球温暖化防止推進員でもあり、幅広い世代に環境問題を考える場も提供している。代表の中谷さんにお話をうかがった。

▼ビーチグラスを握りしめて

「海がきれいになったらいいね」という気持ちが地域で循環したらいいなあという想いから始めたビーチクリーン。こどもを通じてその輪が広がっていくように、楽しんで参加してもらうビーチクリーン＋αに工夫を凝らしている。ビーチフラッグ、ヨガ、焼き芋など。そして、保護者仲間や地域のお店屋さんに協力してもらったビーチグラスの地域通貨、ビーチマネーは、子どもの自主的な清掃活動にもつながっている。

▼まずは足元の環境から

活動は、地域の環境やそこに住む人たちを大切にしている。その一つが小学校のクラブ活動に組み込んだ、「エコクラブ活動」。まずは自分たちの子どもが通う小学校から始めた活動は、徐々に力量が証明されています。外にも広がっている。川の生き物探し、ツリーイング、藁で縄ない、ピザづくり、フィールドビンゴなど、内容は多岐にわたる。自分たちだけでなく、地域の詳しい人たちを先生に、自分たちの住む地域の環境を知り、楽しむ。

▼みんな海から生まれてきたこども

自然と親しんで好きになってもらうことをまずは子どもたちに広げていきたい。そこから大人にも伝わっていくことを期待する。大人も「こどもごころ」をもって自然と触れ合うことで、親子で自然体験をする機会を増やしていきたいと願っている。

うみのこども
インスタグラム
https://www.instagram.com/uminokodomo_kochi

▼取材者：村上（むらかみ）　健太郎（けんたろう）　氏

NPO砂浜美術館　理事長

神奈川県生まれ。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトのもと、地域資源を独自の発想で楽しみながら活動をしている「砂浜美術館」の魅力に惹かれ、二〇〇二年一二月、高知県黒潮町に移住。ちょっとあやしい幡多弁（地方の方言）をあやつりながら、日々地域の魅力を発信している。

日本環境教育フォーラム（JEEF）主催の自然学校指導者養成講座三期生。

https://sunabi.com/

走林社中　プロジェクト紹介
ひとり親家庭支援事業の協働プロジェクト

このプロジェクトは、走林社中が進めてきた「研究提言プロジェクト」と「企業連携プロジェクト」が協働し進められています。

こうした支援事業が持続可能的に続けていけるよう、「本当にこの支援は意味があるのか」「必要としている人にちゃんと届いているか」「どうすれば持続していけるのだろうか」といった問いに対して、研究者と実践者が真剣に話し合い、そうした対話を繰り返す中で互いの知見を深め、支援のあり方について検討してきました。

量的データ、質的データの分析を通して、自然体験を取り入れたこの支援事業が、子どもたちの自尊感情を育み、大人の方の子育てへの自信やレジリエンス（回復力）の支えになっている可能性が見えてきました。一方で、参加をためらわせる経済的・時間的な制約や、情報が届きにくい現実など、支援の「届け方」そのものにも丁寧な配慮が必要であることも明らかになりました。こうした気づきは、どちらか一方だけでは見えなかったかもしれません。現場の実践と研究が協働し、知を積み重ねてきたからこそ形になったものだと思っています。

そして私たちは、この成果を単に報告として終えることなく、多くの方と分かち合い、現場での実践や地域の支援につなげていきたいと考えています。走林社中の電子ジャーナル『ＨＡＭＯＮ』をはじめ、企業・自治体・支援団体のみなさまと共有し、さらに実践が広がっていくことを願っています。

研究と実践がゆるやかにつながり、少しずつ社会全体の支え合いを育んでいく、そんな波紋を、これからも広げていきたいと思っています。

写真：日本キャンプミーティング 2024 にて

大阪体育大学スポーツ科学部
講師　徳田真彦

野外教育を専門とし、授業では「野外教育論」、「レクリエーション」、「野外活動実習」などを担当。研究のキーワードは「地域愛着」、「体験格差」、「社会人基礎力」など。

砂浜美術館
SEASIDE GALLERY

大学研究紹介

「野外教育」をビジネス視点で

―保護者の心理を読み解き、持続可能な事業へ―

私は日本文理大学 経営経済学部にて、スポーツビジネスおよびスポーツマーケティングを専門としています。私の研究テーマは、まさに「野外教育のビジネス」です。これまで、野外教育やキャンプがいかに人の成長に寄与するかという「教育的効果」については多くの研究がなされてきました。しかし、業界を見渡してみると、それらを事業としてどう成立させ、持続させていくかという「経営・マーケティング」の視点からのアプローチは、まだ多くありません。そこで私は、マーケティング（＝顧客視点）のアプローチを用いて、野外教育を分析することに力を入れています。

マーケティングの出発点は「消費者の視点」にあります。実際に、保護者の視点から組織キャンプを構成する要素を調査したところ、「教育効果」「指導者」「施設・安全」「自然への興味関心」「キャンプの知識・技術」「体験」という六つの要素が重要であることが明らかになりました。

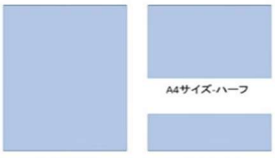
興味深いのは、同じ保護者でも「初参加」か「リピーター」かによって、重視するポイントが全く異なるという点です。初参加の保護者は「施設・安全」を最も重視します。一方、リピーターの保護者は「教育効果」や「自然への興味・関心」を重視する傾向にあります。なお、両者に共通して重要視されていたのは「指導者」と「体験」でした。この結果は、現場でのマーケティング戦略に直結します。初めてのお客様にはまず「不安の解消」を提供して参加のハードルを下げ、リピーターのお客様には「子どものさらなる成長」を提示することで満足度を高める、というアプローチの違いが見えてきます。

現在は、「キャンプの参加者である子ども」と「対価を支払う保護者」という二つの消費者視点に着目して研究を進めています。組織キャンプは、意思決定者（保護者）と利用者（子ども）が異なるユニークなサービスです。両者の相互作用を分析し、現場で活躍する皆様がマーケティング戦略を考える際に、すぐに役立てられるような「生きた成果」を提供できるよう、研究に尽力してまいります。

▼寄稿者：矢野達也
（Tatsuya Yano）
日本文理大学　経営経済学部
スポーツビジネスコース　助教
大阪体育大学体育学部卒業、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科修了。大阪体育大学野外活動実習教務補佐を経て、二〇二四年四月より現職。専門は、野外教育、マーケティング、マネジメント。
組織キャンプなどに多くの人が参加してもらえるように、ビジネスの視点から野外教育について探究している。

広告スポンサー大募集

10,000円から広告スポンサーになることができます。
お問合せはこちらのメールに、「広告スポンサー希望」と明記の上ご連絡ください。



A4サイズ-フル　4万円（税込）
A4サイズ-ハーフ　2万円（税込）
A4サイズ-1/4　1万円（税込）

年に4回の季刊誌として発刊しています。
電子ジャーナル版での発行です。

デザインの入稿、デザイン依頼などは問い合わせしてをお願いいたします。

追って、担当者より返信いたします。

HAMON編集部

支林社中
日本を支える人材、けん引する人材を育てる

カラーで！リンクも貼れま

コラム 一滴

▼寄稿者：
青森大学　総合経営学部　教授
佐々木（ささき）　豊志（とよし）　氏

森と食卓をつなぐ

最近の私は、自分が本当に大切にしたいものが、「何か」を見つめ直している。これまでの半世紀に、私の人生の軸としてきた「自然体験と教育」が時代を追って、繋がったり離れたりしながら、少しずつ自身の思考の輪郭を創ってきた。もうすぐ七〇歳を迎えることを考えると、残り少ない人生の焦りもあるが、それ以上に前へ進みたい意欲がまだまだある。

今は、まさに「自然との関係を取り戻す教育の再構築」のフェーズになったと強く考えている。一九九五年に「くりこま高原自然学校」を立ち上げ、自然の中で主体的に遊び、仲間と協力しながら課題を乗り越える経験は、想像力・共感力・自己肯定感を育む重要な教育の場を創ってきた。森と人、子どもと大人、地域と未来をつなぐ拠点として、さまざまな子どもたちを、時には課題を抱えた若者たちを支援してきた。さらに幼時期の子どもを取り巻く環境・発育発達の課題も見つけ「森のようちえん」の普及にも取り組んできた。

そして近年、最も私の意識の中心を占めてきたのが、子どもをとりまく〝食〟のあり方である。ここ二〇～三〇年の間で、子どものアレルギー、広汎性発達障害の発症率、不登校などが増加している。子どもが口にする食の添加物や農薬に含まれる化学物質の影響を否定できないと考えている。農薬や添加物のリスクを科学的に見極めつつ、また、腸と脳が相互に影響し合う「腸脳相関」のこと、そして、発酵食品や食物繊維など、そしてオーガニックな食材と腸内環境を整える食の価値が再評価されることが重要であると考えている。子どもの未来を支えるために、自然体験活動だけではなく、心と体の発達を支える「食」と「農」、そして「森」が抱える課題を解決しながら「自然体験と教育」に取り組んでいきたい。

青森大学　総合経営学部　教授　佐々木　豊志氏
岩手県出身、大学で野外教育・冒険教育を通じ自然体験を通じた青少年の教育的効果を研究。卒業後山岳写真家を目指しネパールヒマラヤへ、一九九五年宮城県栗駒山腹に「くりこま高原自然学校」開校。二〇〇一年から不登校・ニート・引きこもり支援する長期寄宿を併設。畑、家畜を飼い農的暮らしを創造しながら持続可能な暮らしの仕組みを実践する。二〇〇八年「岩手宮城内陸地震」で被災。二〇一一年東日本大震災で災害ボランティアセンターを立ち上げ被災地支援に遁走する。この間、宮城大学大学院事業構想研究科博士課程で博士号を取得。二〇一七年四月より青森大学に赴任。現在に至る。

Marumimi
ミニマルCMS/ホームページプラットフォーム/ECサイト/データベース構築

編集コラム①　「自然災害」から考える座談会　Part2

走林社中　幹事　谷（たに）　慶子（けいこ）氏

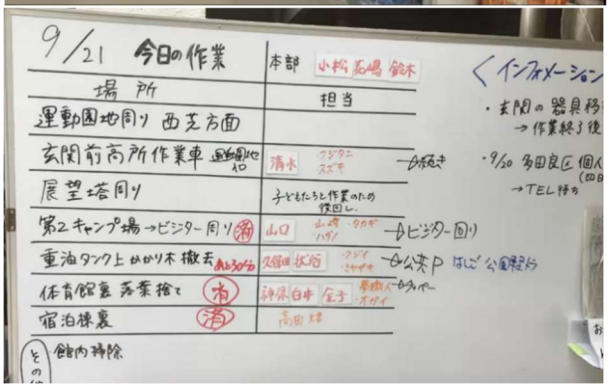
自然災害を振り返る

前回、走林社中のモモの部屋メンバーにオンラインで集って語り合った『自然災害』をテーマにした座談会の続きになります。

岩手・新潟・千葉・熊本。各地で自然災害を経験し支援活動をする中で、感じたことや、学び得たことなどを語って頂きました。

▼災害支援の地域拠点としてできること

白井さんの勤め先である千葉県南房総市の大房岬は、青少年教育施設で国定公園の中にあります。二〇一九年房総半島台風の風害によりマテバシイの森が壊滅的な被害を受け、職場である大房岬自然の家が災害支援拠点となりました。その際、全国各地から延べ八〇〇人もの人が集ってくださり助けてくださり、こんなにも災害支援のボランティア団体が全国にいるのかと驚いたそうです。そして、二ヶ月近く少年自然の家の受入れが出来ない状況の中、日々ボランティアに来て下さる方々がいかに気持ち良く支援して頂くかを考えながら動いていたそうです。参考になったのが、東日本大震災の災害支援ボランティア（RQ 災害教育センター）での経験だと話してくれました。一日八〇名近く来てくれるボランティアの方々や集まる物品の数々。自分たちだけに留めるのは勿体ないのではないかと、岬麓の地域集落のニーズを聞き、瓦礫の撤去やびわ農家支援など支援を展開していったそうです。そして、災害対応で必要なスキルは、自然学校の運営で必要なスキルそのものだということにも気づいたそうです。災害発生時における自然学校の役割は、『地域をつなぐハブ機能になる』ことだと、身をもって実感したと語ってくださいました。



全国各地から届く備品
被災地と支援者を繋いだオンラインショップ「ほしいものリスト」

その日の支援作業や担当が一目でわかるボードを作成
東日本大震災のボランティア経験が参考に

▼しくみについて

熊本の豪雨災害で被災した有田さんから、災害時のしくみの問題が提示されました。被災したからこそわかる災害ゴミ（人工物）の多さや、それを撤去することの大変さ。そして。ボランティアを指揮し、コーディネートする人がいないことによるもどかしさを痛感したそうです。千葉の場合は、市町の災害対応をする行政担当者は二、三名程度だったとのこと。そのような中、被災した際に誰が旗を振るのか、まだ見えていない現状があると白井さんも語ってくれました。皆さんから、被災地支援の経験者や動ける人材を行政に入れていく必要があるのではないか。ネットワークも必要。災害における勉強会などを行い学びあうしくみもあったら良いのではないか。もっとプロフェッショナルな災害支援の団体に国が連携してお金を出さないといけないのではないか…など、経験を踏まえた意見の数々が挙がりました。また、支援に関わる人の話も話題に挙がりました。能登半島の被災地支援で、高校生が来てくれ、若い力が支援に入ることで、地域が元気になったそうです。学生にとっても、今後に繋がる、忘れられない生きた学びとなったことでしょう。

▼歴史が教えてくれること・災害で気づくこと

東日本大震災を経験した岩手の黍原さんは、「土地の記憶を大事にする」話をしてくださいました。なぜ災害が起こったのか、被災した時の状況やその土地の記憶や記録など過去の歴史を掘り起こすことで、学び生かせることが沢山あります。自然災害は、時に人災かもしれません。自然に対する捉まえ方も人それぞれ。災害後「自然が憎い」ということを言う人もいれば、「今まで生かしてもらった自然に感謝」する人もいます。自然をどう捉え、災害から学び生かせることは何か。歴史を紐解き、地域の方々と話すことで、見えてくることが沢山あります。更に、体験プログラムとして子どもたちと一緒に学ぶことも大事なのではないかという提案もありました。

▼自分の足下でできることは何か

新潟の笹川さんは、能登半島地震の被災地支援をしながら「自分の近くのことをおろそかにして、遠方の災害支援をやっていてもしょうがない」という思いが湧いてきたことを語ってくれました。マザーテレサは、支援に来た人に「あなたの家族は幸せですか。そうではないのならば、帰って下さい。」と伝えたそうです。そこで、最小単位の家族を大切にしなければいけないと自分の足下を見つめ直し、自分ができることは何なのかを考え、まずは、地域の自主防災会に入ったそうです。そして定期的に集会所の近くで焚き火をして、地域のみんなが緩やかに繋がれる場づくりに挑戦した話も伺いました。例えば、挨拶していなかった地域の方と挨拶ができるというような、地域がちょっとずつ良くなるよう育んでいく…こんなことも、僕らは得意なのではないでしょうか。熱く語り行動し続ける姿に、勇気を頂きました。

▼繋がる大切さ

公的な指定避難場所に行くより、住み慣れた近くで普段から繋がりがある場所の方が、安心感もあるのではないか。そして、地域で野外活動をやっている団体がキーマンとなって、受入れたりできるのではないかという話が白井さんからありました。被災した際、有田さんが助けられたのは、SNSで繋がる縁ある人たちの存在だったと話してくれました。また、同じ思考を持つ仲間（テーマ型のコミュニティ）が集うことも安心感に繋がったそうです。黍原さんは、声を挙げ、どこかに救いを求められることがとても大切で、地縁含めいろんな層が混ざり、普段から人との繋がりを網目状に作っておくことが災害時や復興の助けになると語られました。それは、自分が助かるだけではなく、誰かをも助けることに繋がり、更には、人だけでなく全ての生き物や自然物との繋がりも復興する上で欠かせないことだと語ってくださいました。最後に、だからこそ自然体験の役割は重要なのではないかという締めで、座談会がお開きとなりました。

二号続けて掲載した「自然災害から考える座談会」。災害大国である日本において、私たちができることは、たくさんありそうです。都市部含め、各地域が繋がり、語らうことで、より立体的に課題やヒントが見えてくるのではないでしょうか。

是非、皆さん、繋がり、語り合いましょう！

YOUKI SUN ART WORKS　有田　有紀氏
windsoil　谷　慶子氏
一般社団法人　三陸駒舎　黍原　豊氏
NPO法人あそびそだち iLabo　笹川　陽介氏
合同会社　くじらのもり　白井　健氏

ファシリテーター

windsoil　代表　谷（たに）　慶子（けいこ）氏

https://www.instagram.com/windsoil?igsh=b2RvZWlxeGFkZWNs&utm_source=qr
https://www.facebook.com/keiko.kataoka

編集コラム② 旅をして学ぶ

走林社中　運営スタッフ　森本（もりもと）　弘太（こうた）氏

仕事柄たくさんの土地に訪れ、たくさんの方々にお会いする機会があります。そんな私が大切にしている哲学は、旅をして学ぶことです。普段活動しているエリアと違う場所での経験は私の世界を広げてくれます。新しい人との出会いと会話は私の価値観を広げてくれます。しかし、私にも家族（妻と三歳児）がいるので毎回一人で出張に行くのは心苦しくて…。考えた末に辿り着いたのが、家族で旅をして学ぼう！です。今年は宮崎県延岡市、横浜、鹿児島県阿久根市、屋久島、沖縄県に仕事&家族旅で行きました。実は、走林社中の桜井さんのご自宅に家族でおしかけたこともあります（笑）

今回は、そんな森本家の取り組みの一部を皆さんに紹介いたします。

▼屋久島の旅

私たちの住んでいる福岡県糸島市からハイエースに乗って鹿児島の港まで約三〇〇キロの旅。長い道のりもいろいろな話をしているとあっという間です！普段家ではしないような話をできるのも旅の面白さです。

鹿児島市内に一泊して、夜は地元の居酒屋へ。地方は子どもウェルカムの居酒屋さんも多いので嬉しいですね。

次の日は、朝からフェリーに乗っていざ屋久島へ！乗り物が大好きな息子は、フェリーで大はしゃぎです。多感なこの時期にたくさんの経験の機会を作れるのは嬉しいです。途中で子どもが寝たら、夫婦それぞれの自由時間で、私はもっぱらパソコンで仕事を始めてしまいます。屋久島に着いたらフィールド開発と打ち合わせの連続です。もちろん仕事で来ているので、しっかりとスケジュールを組んで進めていきます。その間は、二人を公園や海などに降ろして待機してもらいます。小学生くらいになったら、一緒にフィールド開発できるかな。宿はいつも一棟貸を選びます。基本的には何泊もしますので、一拠点に滞在して活動します。そして、食事はできるだけ自炊にしています。子どものキャンプでも大事にしている地元の食材や旬を楽しみます。打ち合わせの時に必ず地元の食材が手に入るお店を伺って買い出しに行きます。もちろんお酒も！

家族で一緒に海山川を満喫しながらしっかりと仕事ができた屋久島旅でした。

▼森本　弘太氏
一般社団法人　センスオブネイチャー
代表　プログラムディレクター
チーフカウンセラー

一九八五年神奈川県生まれ。九州大学大学院修了。日本アウトワードバウンド協会(OBS)で冒険教育に出会ってから野外教育の道へ三年間長野県のOBSで勤務の後、カナダのキャンモアへ。カナディアンロッキーを中心に夏は山岳ガイド、冬はオーロラガイドとしてガイディングを学ぶ。ニュージーランド、クイーンズタウンでの半年間の生活のあと日本へ。福岡YMCAでキャンプ事業部のディレクターとして二年間勤務後、二〇一七年四月エンカレッジ(株)に入社し、企業研修を展開。Sense of Natureの運営責任者として全プログラムを統括・指導する

編集後記

HAMON プロジェクトメンバーより

徳田真彦【三重・大阪】

家の大掃除を少しずつ進めています。きれいになると心や頭もすっきりしますね！掃除、趣味にしようかな。

小林政文【沖縄】

今年も地道な一歩の積み重ねと新しい挑戦の日々を繰り返していきたいと思います。

森本弘太【福岡】

ついに40歳となりました。HOMONを通じて色々な情報に触れて、まだまだいっぱい勉強して社会に貢献したいなぁと思う日々です！40代も益々頑張ります！

小澤潤平【東京】

編集後記を書いている今は師走。なぜ師走はこんなにも慌ただしいのだろうか？きっと、一年間やり残したことをどうにかやろうとしている証。やることが山盛りだ。

編集長より

谷　慶子【三重】

明けましておめでとうございます。新たな節目を迎え、心も新たに。
HAMONもお陰様で、3年が過ぎ、4年目を迎えようとしています。
ご協力頂いた皆さま、お読み頂いている皆さま、有り難うございます。
原稿をつくる過程で人と人が繋がり、新たな気づきや繋がり直し、関係性が深まるなど、関わる皆さま方にとって、少しでも意義ある機会になればと願いながら、編集部一同作成しております。
全国各地で取材頂く「団体紹介」は、47都府県中、残すところ4県！！
【山形・愛知・和歌山・鹿児島】
我こそは！この方を！この取組みを！皆さまへ、是非紹介したいという方がいらっしゃいましたら、教えてください。
今年も皆さまとともに、歩んでいけるHAMONでありますように。

本年もどうぞ
宜しくお願いします

走林社中
soulin2017.net

発行人：桜井義維英
発行年月日：**2026年1月14日 第14・15号**　合併号
編集：谷慶子、徳田真彦、小林政文、森本弘太、小澤潤平

次回発行は、16号
2026年 4月15日(第3水曜）を予定しています